

マンガ文化は永遠か

しょうし ひろし
庄司 博史

民博 民族社会研究部

変わる日本の存在感

ヘルシンキの街の中心部に営業するマンガカフェは開店前からオタクがたむろしコスプレの少女たちが出入りする。マンガやアニメについて、たぶん平均以下の知識と平均以上の偏見をもって、この人気も一過的とたかをくくっていた筆者だが、ここを訪れ正直その信念は今少し揺れている。

日本のマンガやアニメの海外での人気をメディアがとりあげても二〇年はたつたろうか。バブルの打撃から日本経済が慢性的低迷時代に突入していたころだ。今や科学技術でも韓国や中国に追い上げられ苦境に立たされている。ヨーロッパでは店頭にならぶ商品はもちろん、観光客の数やこれらの購買力でも、日本の存在感はずっと薄くなっているようだ。

そんななか、日本のマンガやアニメが欧米などで若者文化を席卷している現象にメディアは飛びついた。政府もマンガ、アニメなど日本のポップカルチャーを日本固有の文化に格上げし、クール・ジャパンのブランド名で売りたいことに必死だ。

しかしこの間、マンガやアニメが各地の文化になじんだことで地元の作家も輩出しはじめ、一方で韓国などは日本マンガを巧妙に模倣しつつ市場を脅かしている。近年はジャパポップの独走にかけりを予見するひともいる。ここヘルシンキでも書店にはマンガに混じって韓国マンガが並び、マンガカフェの壁には日本マンガと見まごうタッチの地元の愛好家の作品が掲示されている。



ヘルシンキにあるマンガカフェの看板

フィンランドに根付くマンガ文化

こんな場所でマンガカフェは経営的にやっているのか。親しくなったカフェのオーナー、ミッラさんに尋ねた。基礎学校低学年でTVやビデオアニメに触れ、高学年でマンガに夢中になった。高校で二層のめり込んだ彼女は、趣味でも生計でも一生これに捧げる決心をしたという。彼女もマンガブームが頂点を過ぎたという話は耳にしたことがある。しかし、その後もマンガカフェの客は減らず、今春ここに移動してからは増えてさえいる。

人口五〇〇万のフィンランドにマンガ専門の出版社は三社あり、一〇〇シリーズ以上がフィンランド語訳されている。現地のマンガ家の作風も日本色べつたりから社会風刺的なものまで多様化しつつある。マンガフェアやコスプレ大会は年数回開かれ、今年九月開催されたコスプレ大会には五〇〇人以上が参加し、日本のマンガキャラクターが大人気だったという。

それでもあのコスプレはこの社会になじむのだろうか。今フィンランドでは子どもはほとんどマンガとアニメに夢中で、今の二〇歳代はすべてそうして育ってきた。そんな文化に偏見のない人がやがて中年になっていくと日本食のようにマンガやアニメ文化も社会全階層に自然に受け入れられるのではないか、現にかつて下品とさげすまれたアメリカのジープは今、ティーンのところ着ていた高年齢者にも愛用されている。「でしよ?」、ミッラさんは言った。筆者にはかれらがマンガやアニメのなに惹かれるかよくわからないが、まだ健在らしいことは確かかのようにだ。